St. Luke's International University Repository

“看護の技”としてのコミュニケーション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小髙, 恵実, Kodaka, Emi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015308

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

【第23回聖路加看護学会学術大会：シンポジウム】

“看護の技”としてのコミュニケーション

座長：小髙　恵実

本大会は，さまざまな看護場面に共通する，対象の全体を観て理解する技術・自分の気持ちや考えを相手に伝える技術について学ぶことを目的として，「看護における『聴く，観る，伝える』技術」をテーマに，どのように対象のこころを理解し，かかわるのかについて，実践的な側面からアプローチする大会となった．大会最後のシンポジウムは，看護の基礎となるコミュニケーション技術に焦点を当て，看護ケアに必要なコミュニケーション技術をどのように教え，工夫し，生かすことができるかについて，具体的な教育・実践活動から学ぶことを主眼として企画された．

本大会のシンポジウムでは，教育・実践の場でのコミュニケーションについて，それぞれの研究や取り組みの経緯や現状，今後の展望など，３人のシンポジストに発表していただき，最後に参加者との質疑応答が行われた．

最初の登壇者である，聖路加看護大学で基礎看護学を担当する佐居由美先生には，看護基礎教育におけるコミュニケーション技術教育の研究内容と成果についてご発表いただいた．基礎看護学実習は，看護学生が最初に行う臨地実習であり，実際に患者を目の前にして患者とかかわることの難しさを体験する実習でもあり，その点についての教育内容と効果についてお話しいただいた．２人目のNPO法人ぷるすあるはの細尾ちあき氏からは，地域での精神疾患の親をもつ子どもの支援という実践活動の側面から，センシティブな子どもの気持ちをどのように緩ませ，受け止め，介入していくかについて，絵本をコミュニケーションの道具とした実際の具体的な方法をご発表いただいた．３人目のウィメンズ・キャンサー・サポートの代表でもあり，広島市議会議員でもある馬庭恭子氏は，看護師でもあるご自身の婦人科がんやその治療体験，入院体験などを通して，同じ婦人科がん体験をもつ女性をどのようにサポートしてゆくか，そのときのかかわり方や工夫について，患者と看護師の両側面から，具体的な方法や対象者の変化などをご発表いただいた．

会場との質疑応答では，教育と臨床現場でのコミュニケーションのあり方の相違や温度差，また地域で人・子どもを支えることの困難さなどについての質問や意見が提起され，３人のシンポジストから，現状や今後の展望が伝えられるとともに，さらなる疑問や意見が活発にだされた．

本シンポジウムは，人を対象とする看護職にとって，その礎となるコミュニケーション技術の重要性と有用性を再確認する機会となった．インターネットやSNSが普及し，コミュニケーションまでもが機械化する昨今にあって，対象者と直面し，じかにかかわる看護職にとって，相手の表情や言動から気持ちを読み取り，それに対応して自身が言動してゆくという相互作用の技術は，ますます看護に求められる専門的技術でもあるといえる．３人のシンポジストの発表を通して，環境や立場や対象は異なれど，それぞれが日ごろの業務や忙しさから忘れられがちな人としてのかかわりや，看護職としてていねいに患者や家族と向き合うときの姿勢やあり方について改めて振り返ることができた．これにより，質の高い看護はその原点にあることを再認識し，今後の看護実践に生かせる有意義な内容であった．

上智大学総合人間科学部